

● 質疑応答

司会：アンケート用紙に感想とかご意見を書いていただき、お帰りに受付に出していただけたらありがたいです。この時間だけではファーストステップ・ジョブグループのことを十分ご理解いただけなくて、もっとお話を聞いてみたいと思われた方、参加してみたいと思われた方には別の機会を設けて、こういう会をまた開きたいと思います。またご案内させていただきたいと思います。

では、残り時間で質問をお受けしたいと思います。質問がありましたら、どうぞ。

親も変わるのか？

会場参加者：子どもを変えるためには親が変わらないとならないというセオリーで、ずっとやってきましたが、今日話を聞いていると、そういう概念、考え方がおかしいのか、そういう考え方は今も必要なのか、わからないんですね。そういうやり方で一定の成果を上げているグループもあるように思います。今回のような形で一定の新しい方法を見つけ出している方もおられる。どっちがいいとかではなく、ファーストステップ・ジョブグループの長所と、そういうグループの長所もあると思いますが、そのへんの関係が混乱しておりますので、その点についてお聞かせいただきたいと思います。

望月：川北さんからステップの中で親の見方を変える、行動分析的にもありましたが、親が何を、どう変わるかということにもよるんですが、ファーストステップ・ジョブグループで、親が変わってないかということ、変わっています。それまでのやり方ではなく、仕事を認める、「今、できること」は何か。「お風呂掃除を仕事としていいの？」「いいんだ」と形づける意味では意識が変わってくる。親の意識が変わるというのは仕事に関して値付けを試してみる。洗濯を外に出したら仕事になる。それを家でやるのはあたりまえと思うのではなく、もっと積極的に「できるんだ」と考え方を変えるのは、実

際には「今、できること」に思い切って値付けをしてみる。最初から「できる、できる」と念仏のように言ってもだめなんで、具体的に見つけて、いいことはこうだと。それをグループの中で社会的に認めるというところで初めて意識が変わってくるのではないか。実際にそういうやり方をして子どもの行動が少し変わってくるという、そこから意識が変わるんだと思います。人に言われて意識を変えろということでは、だめですね。

「親も意識が変わらないとだめ」という言い方は少し間違っていると思います。親の意識は変わらないう「だめ」と言うのではなく「意識は変わるよね」という、やって楽しい、変えてみたいという、勇気づけられるやり方が大事。今までのやり方で「変わらないうだめだよ」というのは、子どもに「ひきこもっては、だめだよ」と言っているのと全く同じ構造ですね。そうじゃないんですね。子どもが楽しんで選択肢があるように親御さんも積極的に勇気づけられるような方法を考えないといけないう。だから連携と皆で協力しあうことで初めて成り立つと思うので、親を変えないういけないうけど、ある意味で実際には変わっている。キャリア・アップを両方でしているのだと思います。ハナから親は変わらないうだめという方針とは一線を画すやり方です。折衷して、どうこうという話ではなく、考え方は基本的に違うと思います。僕の回答ですが。

上田：考え方では基本的には望月先生と同じですが、親の立場としてはお父さんのそういう気持ちは分かります。実は、相談に来られるのは、支援機関、相談機関を回ってから最後にファーストステップ・ジョブグループにこられる方が多いのです。「親が変わる」というのは抽象的なんです。『偉い先生に「親が変われ」と言われたけど、わからなかつた』と悩んでいたお母さんが、ファーストステップ・ジョブグループの話を聞いて「どうなうことが親が変わるなうことなのか、わかつた」とおっしゃる。「今を認める」「今できることを認める」となうように具体的に対応していくことは親の行動が変わっていくことなのです。お父さんが混乱されているのは「親が変われ」となう援助をされているところで良くなつた人がいるなうこと。その方も意図せず我々なうな変わり方をされたのかもしれないう。「親が変われ」と言わず

にちゃんとした方法のもとで変わって良くなったのと、「親が変われ」の叱咤でたまたま変わって良くなった、との違いはありますが。そんなに混乱されなくてもいいんじゃないか、変われという抽象的な言葉に振り回されなくても、行動を変えていけば当然、「親の意識が変わる、親が変わる」という風になるのではないかと思います。

川北：二人が言われた通りだと思いますが、変わることに小さい目標が常に必要かと思っています。大きなことを目標にすると「お前、変わってない」と言われる可能性もある。「いや、僕は変わっているつもりなのに」と。こうなると辛いんですよ。すぐにもでも変われるというか、そういう小さいステップがたくさんあって、肯定的に、ポジティブに変化を見つけていくことができれば、変わるのは楽しいし、具体的だし。そうであれば、「親が変わる」ことは姿勢としては悪くないなと思います。ポジティブで、具体的でスモールステップで変わることがいいのではないかと思います。

居場所も必要か？

会場参加者：私は親の会で居場所を設けて活動してきました。親は親で話しあいをして「あんたの子どもさんに対するそんな言い方は、したらいかん」とか、相談とかして、居場所があって、そこからまた仕事の世話をして、子どもたちが仕事に行く。しんどくなったら、また居場所に帰ってくる。そういうことを繰り返して子どもたちも成長するし、親たちも対応の変化をしていく。そのように発達していく子どもたちもいたんですね。ファーストステップ・ジョブグループは居場所がなくて直接社会にいかれる。野池さんの話があって、仕事に行って、そこでしんどくなった子どもが居場所に帰ってくる場所もあったのかなと思いましたのでね。そういう方向だけがいいのか、そういうやり方もまた一方であるのかなと。我が子でやってきたことに関連して、少し疑問を持ったということなんですけどね。

望月：今日の発表で居場所を否定的に言っているものだから、そのような話になるのは当然かと思いますが、一つは方法論として、どうやって効果があ

るか。居場所で何をそこでやっていくか。ただ来ればいいよ、つないでいくという、あたりまえのステップがあったんでしょうが、「なぜ居場所が必要なのか」というロジックがあまり見えなんですね。疲れたという時、居場所があったらいいと。それは家族だって、いいわけですよ。家族が孤立した形がだめなんで、居場所に行くと仲間がいる。それが大事な時もあるとは思いますが、居場所まで出ていけることを前提で考えていくと、それは、できているなど。出でいなくても社会とつながる、「今」を認める。今は居場所に出でいかないとステップを踏めないよという話に、うっかりするとなる。長い間、ひきこもっている人に「居場所で何をしてもいいよ」というのは困る。その難しさがある。一定のそういうものがあるって居場所に行けるから、次に行けるという流れを生み出したところは、認めるところなので。「今を認める」ということが基本的な案件で、居場所は、あくまで一つの手段ですよ。

上田：ファーストステップ・ジョブグループのこのやり方が、唯一の援助方法で、これしかダメということではないんです。いろいろある中で、我々はこの援助方法をとってやっていくと宣言しているだけの話です。居場所も否定するわけではないです。仲間と一緒にやるのがいいという本人もいると思います。川北さんのフィールドは居場所ですよ。ファーストステップ・ジョブグループはなぜ居場所をつくらなかったかと言うと、そもそも居場所へ行けない、行かない本人たちへの援助を考えたからです。居場所はそこまで出て行けてのものですからね。居場所をつくって「さあ、おいで」と言うただけでは、出て行かない・行けない本人への援助はできません。私もファーストステップ・ジョブグループをやりはじめた時は、家庭から次へと居場所を選択する本人もいるかな、あるいは居場所へ戻る本人もいるかなと思ったのですが、この7年間、居場所を選択したり戻ったりした本人は誰もいません。次を選ぶ際には、きょうとNPOセンターを選択しました。居場所を経なければならないということもないし、居場所まで出ていなくても社会とつながるのだし。NPOセンターを選択した本人の様子から、社会の一員として社会へ出ていけることに喜びを感じていると、これは推測ですが、

そんな風に見えます。居場所が必要なのかどうかとかの話よりも、そこで何をやっているのか、そこに活動の羅列だけでなく論理があるのかどうかの方が大事だと思います。

望月：居場所というのは物理的なものではなく、きょうとNPOセンターは「2時間でもいいよ」ということで、職場が居場所になったとも言えるんですね。物理的なものをつくって、ということではなく「今、できること」をどう認めるか、場所を問わず、家庭の中でも、NPOセンターでも。普通は居場所を出て、焼きとり屋さんのバイトにいかうと。焼きとり屋さんのルールにいきなり行くこともある。それでうまくいったケースもあるけど、野池さんのところは「2時間でいいよ」という恵まれたところであることは事実です。物理的なものが居場所とか家族ではなく「今、できる」、働ける場を皆の協力でできる。そういうステップを踏んでいくことが大事なんだということです。

司会：それではちょうど時間になりましたので、ここで終わりにさせていただきます。今日は長い時間、最後までありがとうございました。講演くださった先生方、ありがとうございました。

それではアンケートの方、よろしくお願いします。